練馬区立石神井東小学校　　令和２年度

学 校 便 り

10 月号

校長　赤尾　眞司

開校１４３年目の石東小の歴史（大正から昭和前半）

校長　赤尾　眞司

石神井東小学校は、明治１１年（１８７８年）５月１８日に、長命寺の境内に仮校舎を置き、谷田（こくでん）小学校として開校しました。校名は谷原と田中（現在の南田中と三原台付近の地名）の一帯が学区域だったため、地名の頭文字をとってつけられました。明治１１年頃といえば、西南戦争が終わり、世の中が少し落ち着いて国作りを始めた時期に当たります。本校を開校するに当たって、地域の人たちから寄付金を集めたり、土地を安く分けてもらったりと、地元の方々の大変な協力とご苦労があったそうです。約４０名の児童と一人の先生での開校でした。

本校では、平成３０年１０月２７日に、開校１４０周年をお祝いして記念式典や記念行事を実施しました。職員玄関や職員室前には、本校の変遷が分かる写真を掲示しています。ご来校の時には、ぜひご覧ください。その中からいくつかを紹介します。

左の写真は、大正時代の初期（１９１０年ころ）の校舎です。とてものんびりとした風景で、敷地の真ん中には見事に咲き誇る三本桜がありました。このころにも通知表がありましたが、今のものとは違い、本のように綴られていて１年生から６年生まで使ったそうです。大正１２年に、関東大震災に見舞われました。校舎は傾き、石碑が倒れるなど極めて悲惨な被害を出しています。

大正１４年（今から９５年前）「石東」の徽章が決まります。これは、現在も校章として使われているものです。

昭和８年に本校に入学して、昭和１４年に卒業された先輩の文章がありましたので紹介します。当時は東京市立石神井東尋常小学校といって、今の順天堂大学病院の場所にありました。学校の通学区域は今の富士見台、南田中、高野台、谷原、三原台、石神井町の一部を含めた広い範囲で、遠い家の子は２㎞も歩いて登校したそうです。学級は男子と女子が別の組に分けられ、全校児童は４５０人くらいでした。児童の服装は、着物の子が半分、洋服の子が半分だったそうです。校舎は木造２階建で、２階から西側を眺めると麦畑と松林が遠くまで続き、その向こうに見えた富士山や秩父連山は見事だったそうです。女子はその頃も強く、男子よりも優遇されていたなんてことも書かれています。

子供たちの遊び場の１番は、今も昔も学校の校庭でした。次が長命寺や氷川神社の境内、その次が石神井川などの川遊びでした。どんな遊びをしていたかというと、大勢が集まらなくてもよくてお金もかからない遊びが中心で、徒競走や走り幅跳び、地面に円を描くだけでできる相撲が多かったようです。また、竹とんぼ飛ばしや「ヒーフー、サン、シー」という竹篦（たけっぺら）を手の上で躍らせる遊び（私もどんな遊びなのかわかりません）が盛んでした。女子はお手玉やおはじきをよくやっていました。石神井川には川幅の広い格好の泳ぎ場が数か所あって、楽しい遊び場であり、水練の場所になっていました。

昭和１６年に太平洋戦争が始まると、このような楽しい生活が一変しました。校名は石神井東国民学校に代わり、戦争に勝つための教育が厳しく行われました。戦争が激しくなってきた昭和２０年になると、学童疎開が始まります。石神井東国民学校でも昭和２０年４月２８日に、群馬県山田郡梅田村（現在の群馬県桐生市梅田）に学童疎開します。通学したのは梅田村南国民学校（現在の桐生市立梅田南小学校）、生活は西方寺（さいほうじ）、渭雲寺（いうんじ）、高園寺（こうおんじ）、長泉寺（ちょうせんじ）の４カ所に分かれていました。学童１７４名、職員１０名、保母８名での疎開でした。疎開した人たちは皆「空腹」に悩まされています。茶碗１杯の大豆ご飯を、唾液で甘くなるまで何百回となくかんで２０分もかけて食べた、年中空腹の食べ盛りの男の子達が、青い梅の実を食べ過ぎておなかを壊した等の話が書かれていました。８月１５日に戦争が終わり、９月末、夢にまで見た白いおむすびをお弁当にもらい、トラックで東京に帰って来たそうです。大変な時代を生きてきた先輩達もたくさんいました。

【参考資料：本校１００周年記念誌、長命寺考余聞（増島一穂著）】